

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：32663

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05606・19K20812

研究課題名（和文）歌会における懐紙・短冊のデータベース化と中世歌会制度の解明

研究課題名（英文）The study of Poetry Reading in the Middle Ages

研究代表者

今井 祐子（高柳祐子）（IMAI, YUKO）

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：60821973

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：公宴歌会（宮中で行われた晴儀の歌会。鎌倉時代後期から正式な制度として始まるが、室町時代にその整備が行われた）の開催実態に迫ることが研究の目的である。当初の予定通り、後柏原天皇代（室町時代後期、公宴御会の整備に力を注いだ）に行われた公宴歌会に関して、『実隆公記』、『元長卿記』、『言継卿記』などの公家日記や私撰集、私家集、文書、短冊、懐紙類の集成によって、その実態に迫ることが出来た。これらの中には、従来ほとんど知られていなかった資料も含まれる。これにより、後柏原天皇が公宴歌会の制度を整備した天皇として位置づけられ、現在の宮中歌会始の直接のルーツとも評価できることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国民の和歌（短歌）への関心の高まりは、宮中歌会始の応募数が平成以降右肩上がりに増加していることからもうかがえる。宮中歌会始のごとく、厳格なルールに則って行われる儀式が、文学（創造）と無理なく融合するという形式は、我が国に特有の文化である。そういった日本人の心性が何に由来するのか、和歌や歌会の制度化の過程を解明することで知ることができる。

また、これまでの和歌研究では、表現のありようにもっとも注意が払われてきたが、歌会という発表の「場」が歌人の表現を規定する面があったという指摘を通じて、表現の独創性や類似性ばかりに注目する研究動向に一石を投じることができたと思う。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to approach the actual situation of “kou-en waka-kai” held in the palace. As originally planned, kou-en waka-kai” held in the late Kashiwabara Emperor period (the latter half of the Muromachi period) was able to get a closer look at the actual situation due to the collection of official diaries, collections of poems, and papers, these materials include those that are not yet known. As a result, it became clear that Emperor Gokashiwara was positioned as an emperor who had established a system of kou-en waka-kai”, and could be evaluated as the direct roots of the beginning of Ceremony of the Utakai Hajime (Imperial New Year's Poetry Reading).

研究分野：和歌文学

キーワード：公宴御会 懐紙 短冊 歌会

## 1. 研究開始当初の背景

和歌文学研究の分野では、八代集と呼ばれる『古今和歌集』から『新古今和歌集』までの時代の研究が盛んで、それ以降については文学的価値が劣るものとの評価から、研究上は等閑視されてきた。というのも、この時代の和歌表現は類型的で、創造性に欠けるきらいがあるからである。近年では、室町時代以降の和歌、特に歌会への注目が集まってきており、その実態への関心が高まっているといえる。

私はこれまで、宮中の公宴御会に関する論として「和歌史の岐路に立つ天皇 後柏原天皇と御会の時代」(『国語と国文学』86巻8号、2009年)、公家たちの私邸での歌会、特に飲食を伴う会に関する論である「愉悦としての和歌 室町歌会新考」(『日本文学』58巻9号、2009年)、公家の私邸で行われる月次歌会に関する論である「甘露寺親長の歌会 室町和歌史一面」(『国語国文』86巻11号、2017年)等の論文を発表し、当該時代の和歌への視点や評価の転換の必要性を訴えてきた。この中では、類型的な表現こそ、当時の歌人が重んじたものであり、それが歌会という和歌の場に大きく関係することも明らかにしている。

このように、創造性の有無だけが文学的価値を決めてきた従来の研究に対して、その妥当性に疑問を投げかけてきたわけだが、その過程で痛感したのは、数多くの資料がいまだ調査がなされないまま、あるいはその性格を明らかにされ得ないまま、全国各地に点在しているという事実である。確かに、『和歌大辞典』(明治書院)の改訂版(2014年、古典ライブラリー)では、室町時代の項目が大幅に増加され、また基礎資料も徐々に整備されてきてはいるものの、残されている手つかずの資料は膨大であり、まだまだ研究は端緒についたばかりである。資料の整理をし、性格を明らかにし、それを十分に生かすことが出来る状態になってはじめて歌会の全容もみえてこよう。残された資料の多さは、彼らが歌会に向けた熱量の大きさを示すものにほかならない。

歌会関係資料は、和歌文学のありようを明らかにする上で不可欠の要素であるにも関わらず、基礎研究すら十分とはいえない。以上が研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

公宴御会は、中世において確立され、近世まで引き継がれた宮中行事である。さらに、明治天皇が東京に遷都した後、多くの宮中行事が形をかえるなかで、ほぼ変わらない形で引き継がれたものでもある。大正、昭和を経てさまざまな変化が加えられ、現在の「歌会始」となった。現在の宮中行事の中でも、「国民と皇室をつなぐもの」という価値を持つものである。

本研究は、この公宴御会の実態を明らかにすることを目的とする。当該研究が対象とする室町時代末期は、いわゆる応仁の乱以後の戦国時代に重なり、長く文学が不毛な時代であると言われてきた。朝廷の窮乏もその一因である。しかし、この時代にこそ、歌会始のルーツたる公宴御会の整備が行われた、和歌にとっても歌会にとっても画期となる重要な時期である。あらゆる制度は発足から安定までに一定の期間を有し、その中で何度か変化を見せる。本研究が特に室町時代後期の歌会のありように注目すべきゆえんである。

ところで、和歌文学研究には、用例の検討が欠かせない。このため、この分野では『新編国歌大観』『私家集大成』などの検索ツールがとても発達している。特に、平安期のものにかんしては、現存資料が何らかの形でデータベース化されていると評価できる。それに対して、当該研究が対象とする室町期以降は、含まれる歌集の数が限られ、データベース化が進んでいない。本研究を通じて、多くの資料をデータベース化し、研究の進捗に寄与したい、それがもう一つの目的である。

あわせて、歌会の解明によって期待される和歌文学研究全体への寄与について、次のような視点もあわせて持っている。文学が創造的行為であり、そこにこそ価値があることは自明だが、一方で、歌会が主要な創作の場であった時代には、儀式の進行や懐紙の書き方などの「型」が重要とされ、作歌という創造的行為にはさほど重きが置かれていなかったという事実がある。従来はこのために当該時代の評価が低かったのだが、しかし、こうした「型」の維持こそが、現代まで和歌(短歌)というものを持続させてきた源であるのも事実であり、創造的行為という観点からだけでは和歌の本質は理解し得ない。

歌会始に多くの短歌愛好家が応募するのも、そこに選ばれることが榮譽であるのみならず、儀式への参加という、目に見える形での榮譽や満足を得られるからであり、何よりもその体験や臨場感が得がたいものであるからであろう。和歌というのは、単なる文学、紙と筆だけでできている机上のものではなく、もっと社会的な行為なのではないか。

そう考えなければ、現代人が「筆」の自筆でしたために応募するという、低くはないハードルをやすやすと超える人が後を絶たない理由が理解できない。このように、歌会の解明は、和歌とは何か、という根源的な問題をとく鍵となるのではないかと考えられるのである。

### 3. 研究の方法

歌会に関する情報を網羅的に集積することを目指す。具体的には、公家日記を中心とする記録類および関連歌集（『公宴続歌』等）によって骨格（開催年時、参加者、歌題、実施次第等）を作り、関連資料（懐紙や短冊などの一次資料、開催に関する文書類、私家集等々）によって肉付けするという作業である。資料についての個々の名称などは、煩雑になるのでここではいちいち掲げないが、「後柏原天皇公宴御会年表（二）」（『文学論藻』九四号、二〇二〇年三月）によってごく一部を示すと、次のようになる。

御会集・・『公宴続歌』（和泉書院、二〇〇〇年）

『内裏御会』（龍谷大学蔵）

『歌書袖珍』（宮内庁書陵部蔵）

『近代和歌』（歴博蔵高松宮旧蔵）

『御五時代和歌』（龍門文庫蔵）

公家日記等・・『実隆公記』、『元長卿記』、『守光卿記』、『続史愚抄』、『お湯殿の上の日記』

私家集等・・『雪玉集』、『政為詠草』、『姉小路濟継集』、『後柏原院御集』、『続選吟集』

活字として出版されているものはもちろん、いまだ活字となっていない多くの資料は、図書館や美術館、博物館などの所蔵調査から始め、東京大学史料編纂所の紙焼き写真やマイクロフィルム、国文学研究資料館が電子公開している写真などを活用し、関連するものをあぶり出すところから始めた。

懐紙や短冊は美術館の展覧会目録や古書店の販売目録も活用した。このように、まずは手当たり次第に資料を集めることに注力した。こちらも「後柏原天皇公宴御会年表（二）」によって、手鑑になっているもののみを示すと、次のようになる。

懐紙・・『御懐紙手鑑』、『懐紙手鑑』（どちらも東山御文庫蔵）

『懐紙帖』（出光美術館蔵）

短冊・・『短尺鑑』、『千世の加寿』（どちらも MOA 美術館蔵）

これ以外に単独で伝来しているものもあるが、煩雑になるのでここでは掲示しない。

こうした地道な作業を繰り返すことで、資料と資料をつなぎあわせ、従来は年時や性格が不明とされたものも、その内実を明らかにすることができる。こうして一つ一つの歌会の情報をさらに集め、相互の情報をつなぎ、充実させていく。

ある程度の資料が集まり、歌会の情報が集まったところで、それらの分析を行い、歌会の性格や制度化の過程を明らかにしていくことにしたが、具体的には4. 研究成果に記載する通りである。

### 4. 研究成果

後柏原天皇代に関しては開催された全ての公宴御会の情報の骨格をまとめることができ、一定以上の成果を得られたと自負している。成果の一部は「後柏原天皇公宴御会年表（二）」（『文学論藻』94号、2020年3月）として公表した。これには、年次、歌題、根拠となる歌集および家集、備考として参照すべき資料等、懐紙や短冊の伝存状況などが網羅的に記載されている。ただし、年表という性格上、記述はごく簡便なものとならざるを得なかった。

このように、懐紙や短冊類も、一定程度は内容を明らかにし得たが、懐紙や短冊については、所蔵を明らかにするところから始めねばならず、また所蔵や内容を確認したものでも、歌会に紐付けすることができなかつたものも数多くある。また、性格を明らかにしたとしても、現所蔵者が不明であるために公表できないものもあつた。今後の課題である。この研究成果の公表によって、美術館や博物館、あるいは個人の所蔵者などが、自らの所蔵する懐紙や短冊の由来を知ることが出来ることに期待したい。

最後に、蓄積した情報の分析から得られた知見と今後の展開を以下に述べる。室町時代の歌会が基本的に人々の参会を伴わない「紙上」のものであり、特別な会だけ音声を伴った発表（披講）を行うこと、そしてそれが大きな特徴であることはすでに指摘した（「和歌史の岐路に立つ天皇 後柏原天皇と御会の時代」）が、音声による発表（「披講」）。これまでは、「紙上」の方に注目して考察を続けてきたが、今後は歌会における「音声」を用いた和歌の発表のあり方（「披講」）に注目し、平安時代から室町時代に至るまでの変容を明らかにすることで、より立体的な歌会史を描くことが出来るとの見通しを得ることが出来た。また、室

町時代は「歌合」が減少するために「歌合」のあり方にはこれまで注目してこなかったが、「歌会」と「歌合」には「披講」の形式に大きな違いがあることに気づくことができた。具体的には、「歌合」では単に歌を音読するにとどまるのに対し、「歌会」では節をつけて「歌う」という点である。このことは、音声での発表のあり方が「歌会」の性格を知る上での重要な視点であることを示していると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高柳祐子	4. 巻 94
2. 論文標題 後柏原天皇公宴御会年表（二）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学論藻	6. 最初と最後の頁 1～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----